



図書館だより

2026 年
8 月 28 日発行

秋草学園高等学校 図書館

二学期開始、あっというまに桔梗祭。図書委員会は、「ブックロード☆2026」で全員参加します。自分のイチオシの本を POP にして、体育館脇通路に掲示します。“星の数ほど本がある中、キラッと光る 1 冊が見つかる★POP 街道”です。本の実物は図書館内に展示、もちろん借りることができます。

「何を読んでいいかわからない……」という方は、図書委員が後押しします。「あっ、私と同じ感性……」「読むのが恥ずかしかったけど、読んでいいんだ」など、本と向き合うのが苦手だった人にも参考になること間違いなし。

第 175 回芥川賞・直木賞 決定

第 175 回芥川賞・直木賞は 7 月 15 日に発表されました。受賞はどちらも女性作家。そして、作品も女性がどん底の環境から這い上がり、自我を確立する様子を描いています。ということで、今回のキーワードは「女性」といっても過言ではないでしょう。

芥川龍之介賞

- 913.6-1 『ゾンビ回収婦』 小砂川チト(著)/講談社
AI に支配される世界となると思いつくのは『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』ですが、この本は、文や会話のやりとりが何十番もある歌のようなリズムの『限りなく透明に近いブルー』(第 75 回芥川賞受賞作)に近いと感ずります。一気に読むことをおすすめします。



参考、第 175 回芥川龍之介賞 候補作

- 913.6-1 『悪い血』 鈴木涼美(著)/文藝春秋
913.6-2 『丹心/まごころ』 仁科敏(著)/新潮社
913.6-3 『ソリティアおじさんがいた頃』 村司侑(著)/文藝春秋
913.6-4 『アンチ・グッドモーニング』 八木詠美(著)/河出書房新社

直木三十五賞

- 913.6-7 『けんぐわい』 朝倉かすみ(著)/光文社
「えっ？ 圏外？ スマホの話？」ではありません。時は江戸時代、いわゆる時代小説です。今回の候補作の『見えるか保己一』も時代小説です。この際「時代小説」というジャンルを覚えてしまいましょう。ついでに日本史にも詳しくなるおいしいジャンルです。



参考、第 175 回直木三十五賞 候補作

- 913.6-1 『見えるか保己一』 蟬谷めぐ実(著)/KADOKAWA
913.6-2 『多類婚姻譚』 皿良ゆう(著)/講談社
913.6-3 『#台所のあるところ』 原田ひ香(著)/文藝春秋
913.6-4 『青天』 若林正恭(著)/文藝春秋

『見えるか保己一』に関連して

- 289.1-1 『奇跡の人・塙保己一 ヘレン・ケラーが心の支えとした日本人』
『素顔の塙保己一 盲目の学者を支えた女性たち』 堺正一(著)/埼玉新聞社

塙保己一(はなわ ほきいち)(1746~1821)は埼玉県本庄市出身、郷土の偉人です。盲目にして『群書類従』(何千冊もの膨大な古今の著作物を分類)をまとめました。紹介した 2 冊の著者は塙保己一学園(川越市・旧埼玉県立盲学校)の校長先生でもありました。

新着コーナーの気になる本

- 596-1 『薬屋のひとりごと 猫猫の調合書』 日向夏(著)真楠ヨウ(料理)/イマジカインフォス

小説・アニメの異世界が突如身近になるのは、まさにお料理です！ 司馬遼太郎の小説・エッセイは必ずといっていいほど料理談義になるし、『ゴールデンカムイ』は「冒険サバイバル+グルメ」ジャンルとも言えます。この本も「あっ、薬屋は料理ジャンルだったんだ」「架空の料理ではないんだ」と気づかせてくれます。新作ショートストーリーも収録されていますので、薬屋ファン必見です。

司書の今月はこの本読みました

本を読まない司書ですが、テレビで 4 月期のドラマに文学を主題にしたものがあると知り、「司書だから職業柄知識をつけようかな」と見だしたらハマりました。原作は『月夜行路』(秋吉理香子(著)/講談社/B913.6-7)です。なんとなく『暗夜行路』(志賀直哉(著)/角川書店/B913.6-3)をリスペクトしている書名だなと感じ、『暗夜行路』も再読。内容を知っているとはいえ長編で大変でした。『月夜行路』との共通点は、「父と仲が悪い」です。

志賀直哉といえば短いずっと読めるものが多く、司書は「小僧の神様」が気に入っています(『城の崎にて 小僧の神様 改版』の一遍)。100 年以上前の日常が、自分の祖父母から父母に伝わってきた話(電車に乗れともらったお金を使わず、歩いてちゃっかりお小遣いにしてしまう)にシンクロして懐かしさを感じるのです。

さて、『月夜行路』ですが、文学を主題としたミステリーで、まだまだ続くんじゃないかな。

【横関】